甲冑堂

泉鏡太郎

青空文庫

橘南谿が東遊記に、陸前国苅田郡高福寺なる甲冑堂の婦人像を記せるあり。

奥州白石の城下より一里半南に、才川と云ふ駅あり。此の才川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近来の凶作に此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ僧も不住、明寺となり、本尊だに何方へ取納しにや寺には見えず、庭は草深く、誠に狐梟のすみかといふも余あり。此の寺中に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故将堂とあり、大さ纔に二間四方許の小堂なり、本尊だに右の如くなれば、此小堂の破損はいふ迄もなし、やう〳〵に縁にあがり見るに、内に仏とてもなく、唯婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。これ、佐藤次信忠信兄弟の妻、二人都にて討死せしの ち、其の母の泣悲しむがいとしさに、我が夫の姿をまなび、老ひたる人を慰めたる、優しき心をあはれがりて時の人木像に彫みしものなりといふ。此の物語を聞き、此像を拝するにそゞろに落涙せり。（略）かく荒れ果てたる小堂の雨風をだに防ぎかねて、彩色も云々。

甲冑堂の婦人像のあはれに絵の具のあせたるが、遥けき大空の雲に映りて、虹より鮮明に、優しく読むものゝ目に映りて、其の人恰も活けるが如し。われら此の烈しき大都会の色彩を視むるもの、奥州辺の物語を読み、其の地の婦人を想像するに、大方は安達ヶ原の婆々を想ひ、もつぺ穿きたる姉をおもひ、紺の褌の嫣々をおもふ。同じ白石の在所うまれなる、宮城野と云ひ信夫と云ふを、芝居にて見たるさへ何とやらむ初鰹の頃は嬉しからず。たゞ南谿が記した る姉妹の此の木像のみ、外ケ浜の砂漠の中にも緑水のあたり花菖蒲、色のしたゝるを覚ゆる事、巴、山吹の其にも優れり。幼き頃より今も亦然り。

元禄の頃の陸奥千鳥には――木川村入口に鐙摺の岩あり、一騎立の細道なり、少し行きて右の方に寺あり、小高き所、堂一宇、次信、忠信の両妻、軍立の姿にて相双び立つ。

軍めく二人の嫁や花あやめ。

また、安永中の続奥の細道には、――故将堂女体、甲冑を帯したる姿、いと珍らし、古き像にて、彩色の剥げて、下地なる胡粉の白く見えたるは。

卯の花や威し毛ゆらり女武者。

としるせりとぞ。此の両様とも悉しく其の姿を記さゞれども、一読の際、われらが目には、東遊記に写したると同じ状に見えて最と床し。

然るに、観聞志と云へる書には、斉川以西有羊腸、維石巌々、嚼足、毀蹄、一高坂也、是以馬憂※※、人痛蝮艱、王勃所謂、関山難踰者、方是乎可信依、土人称破鐙坂、破鐙坂東有一堂、中置二女影、身着戎衣服、頭戴烏帽子、右方執弓矢、左方撫刀剣とありとか。

此の女像にして、もし、弓矢を取り、刀剣を撫すとせむか、いや、腰を踏張り、片膝押はだけて身構へて居るやうにて姿甚だとゝのはず、此の方が真ならば、床しさは半ば失せ去る。読む人々も、恁くては筋骨の逞しく、膝節手ふしもふしくれ立ちたる、がんまの娘を想像せずや。知らず、此の方は或は画像などにて、南谿が目のあたり見て写し置ける木像とは違へるならむか。其の長刀持ちたるが

姿なるなり。東遊記なるは相違あらじ。またあらざらむ事を、われらは願ふ。観聞志もし過ちたらむには不都合なり、王勃が謂ふ所などは何うでもよし、心すべき事ならずや。

近頃心して人に問ふ、甲冑堂の花あやめ、あはれに、今も咲けりとぞ。

唐土の昔、咸寧の時、韓伯が子某と、王蘊が子某と、劉耽が子某と、いづれ華胄の公子等、一日相携へて行きて、土地の神、蔣山の廟に遊ぶ、廟中数婦人の像あり、白皙にして甚だ端正。

三人此の処に、割籠を開きて、且つ飲み且つ大に食ふ。其の人も無げなる事、恰も妓を傍にしたるが如し。剰へ酔に乗じて、三人おの〳〵、其の中三婦人の像を指し、勝手に撰取りに、おのれに配して、胸を撫で、腕を圧し、耳を引く。

時に、其の夜の事なりけり。三人同じく夢む、夢に蔣侯、其の伝教を遣はして使者の趣を白さす。曰く、不束なる女ども、猥に卿等の栄顧を被る、真に不思議なる御縁の段、祝着に存ずるもの也。就ては、某の日、恰も黄道吉辰なれば、揃つて方々〳〵を婿君にお迎へ申すと云ふ。汗冷たくして独りづゝ夢さむ。明くるを待ちて、相見て口を合はするに、三人符を同じうして聊も異なる事なし。於是蒼くなりて大に懼れ、斉しく牲を備へて、廟に詣つて、罪を謝し、哀を乞ふ。

其の夜又倶に夢む。此の度や蔣侯神、白銀の甲冑し、雪の如き白馬に跨り、白羽の矢を負ひて親く自から枕に降る。白き鞭を以て示して曰く、変更の議罷成らぬ、御身等、我が処女を何と思ふ、海老茶ではないのだと。

木像、神あるなり。神なけれども霊あつて来り憑る。山深く、里幽に、堂宇廃頽して、愈活けるが如く然る也。

青空文庫情報

底本：「新編　泉鏡花集　第十巻」岩波書店
　　2004（平成16）年4月23日第1刷発行
底本の親本：「桜草」文芸書院
　　1913（大正2）年3月18日
初出：「新小説　第十六巻第六号」春陽堂
　　1911（明治44）年6月1日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「甲冑堂《かつちうだう》」となっています。
※初出時の署名は「泉鏡花」です。
※初出時は「一景話題」の総題で、「夫人堂」「あんころ餅」「夏《げ》の水」とともに発表されました。
入力：日根敏晶
校正：門田裕志
2016年10月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

甲冑堂

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/